

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：32501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13170

研究課題名（和文）健康課題を持つ児童生徒の支援を目指した卒前多職種連携教育の開発と有効性の検証

研究課題名（英文）Development and Effectiveness Verification of Undergraduate Interprofessional Education Aiming at Assistance of Pupils and Students with Health Problems

研究代表者

齊藤 理砂子（Saito, Risako）

淑徳大学・総合福祉学部・准教授

研究者番号：90634907

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、他職種と連携しつつ健康課題を抱える子どもを支援できる学生の育成を目指した、卒前多職種連携教育プログラムを開発した。そして養護教諭課程と保健師課程の学生に対して実施したところ、他職種連携に関する意識の向上が窺え、本プログラムの有効性が示された。またインタビュー調査と文献調査を行い、「チームとしての学校」における協働に影響を与える要因を明確化した。さらに養護教諭に対して行った質問紙調査からは、これらの要因のうち、「保健教育の実施」「養護教諭と教諭の共同理解」「管理職の関与」は正の、「多忙」は負の影響を与えることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代的健康課題を抱える子どもへの支援には、専門職同士の連携が不可欠であるが、そのための卒前多職種連携教育はほとんど行われていなかった。本研究では合同授業や専門職種間の相互理解と尊重、専門職間の連携による障害と対立の確認等を取り入れた卒前多職種連携プログラムを開発し、その有効性を確認した。この試みは、保健医療職と教育職が連携する分野における、今後の多職種連携教育のあり方への貴重な第一歩と言える。また、学校における専門職間の協働に影響を与える要因が明確化されたことは、今後の「チームとしての学校」や多職種連携教育のあり方に示唆を与え、より効果的な協働や教育プログラムが期待できるであろう。

研究成果の概要（英文）：An undergraduate interprofessional education program, aiming at nurturing students who can cooperate with others in assisting children with health problems, was developed and conducted for students in Yogo teacher and public health nurse training courses. The result revealed the increase of their awareness to interprofessional work, and thus the effectiveness of the program was implied.

Next, a literature review and an interview survey were conducted for clarifying factors affecting the cooperation between Yogo teachers and other teachers in “school as a team.” Moreover, a questionnaire survey on Yogo teachers implied that the factors such as “conducting health education,” “mutual understanding between Yogo teachers and other teachers,” “management involvement” had positive effects and “busyness of Yogo teachers” had negative effects on the cooperation.

研究分野：学校看護、ヘルスプロモーション

キーワード：養護教諭 協働 教諭 チームとしての学校 組織文化 多職種連携教育 児童生徒の現代的健康課題 保健師

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近年日本社会は、少子高齢化、情報化、格差拡大等により急変しており、子どもたちは、いじめや不登校、肥満・痩身等、様々な心身の健康問題に直面している。また医療技術の進歩により、慢性疾患や障害のある子どもたちが学校で過ごすことも多くなってきている。これらの多様な現代的健康課題に対応するためには、学校の全教職員がチームとして協力・連携することが求められている(文部科学省、2019)。

問題を抱える人への支援のために、種々の専門職・専門機関が協力・連携することを多職種連携(IPW)という(埼玉県立大学、2009)。IPWを円滑に機能させるには、多職種連携教育(IPE)が有効であり、実際IPEには学習者の「学ぶ姿勢、各種の文化の違いに関する知識、患者のアウトカムへの認識、自らの役割への責任感、専門家の連携により患者に利益が及ぶことへの気づき」等を涵養する効果があるとされる(Furrら、2015)。しかしIPEは実施する時期や環境によっては、職種間の軋轢をもたらすことも報告されているため(竹内ら、2017)、専門教育の段階から導入することが望まれている(Cooperら、2001)。

日本においては2000年前後から、保健医療福祉系大学を中心にIPEを取り入れる大学が増加しているものの、教員養成課程においてIPEを取り入れている大学は僅かである。だが多様化・複雑化した健康課題を抱える子どもを支援するには、学校における教諭や学校外専門職のIPWが不可欠であり、教育領域におけるIPEの整備は喫緊の課題である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)小学校教諭、特別支援学校教諭、養護教諭、保健師を志す学生が、将来互いの専門性を活かして円滑に連携・協働することを目指した、卒前多職種連携教育プログラムの開発と、その教育効果的な有効性の検証である。またプログラムの基礎資料として、(2)「チームとしての学校」における協働に影響を与える諸要因をも明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 卒前多職種連携教育プログラムの開発と検証

先進的なIPEの特徴である「専門職間の個性、相違、ダイバーシティの尊重」「各専門職のアイデンティティと専門知識の明確化と維持」(Barr H, Low H, 2011)等の習得を目的とし、養護教諭課程及び保健師課程の大学生を対象とした、講義と合同授業からなる卒前多職種連携教育プログラムを開発した。講義(90分)には、IPWや互いの専門職についての体系的知識の教授、合同授業(180分)には、精神疾患を抱える子どもの支援についての、両課程学生を交えたグループワークを盛り込んだ。

で開発したプログラムを、A大学第2学年に所属する養護教諭課程及び保健師課程の学生(計46名)に対して実施し、実施1週間前と直後に同じ尺度を用いて質問紙調査を行った。調査内容は、子ども・保護者の健康を扱う専門職の連携と協働に対する意識を問う専門職連携・協働尺度(山本(2017)を参考に作成。以下連携・協働意識尺度)、チーム医療の協働意識を測る日本語版ATHCTS(山本ら、2012)、専門職連携について学ぶ準備性・志向性を測定する日本語版RIPLS(田村ら、2012)である。

プロセスとアウトカムの両側面からプログラムを評価した。前者では講義者による学生の様子の観察を考察し、後者では尺度得点の前後変化を検定した。

### (2) 「チームとしての学校」における協働に影響を与える要因の明確化

養護教諭10名を対象に、協働に影響を与える要因についてインタビュー調査を行った。調査結果は文書化した上で、テキストマイニング(共起ネットワーク分析等)を行った。

文献調査によってさらに要因を探索し、で得られた要因と併せて、シャインの組織文化論(エドガー・H.シャイン、2017)に沿って分析した。さらに、どのような要因がどのように協働に影響を与えるかについての因果モデルを創出し、モデルに含まれる諸要因及び協働を問う質問票を作成した。

で作成した質問票を用いて、全国の小中高等学校の養護教諭3570名(無作為抽出)を対象にアンケート調査を行った。そしてその結果に対して相関分析及び回帰分析を行い、で創出した因果モデルの検証を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 卒前多職種連携教育プログラムの開発と検証

3(1)で述べたプログラムを開発し、その教育効果の検証を行った。その結果、プロセス評価では、新たな知見の習得や、異課程同士が協同して考えることの重要性への気づき等の有効性が示された。また、プログラムに盛り込まれた様々な工夫が、大学生たちの【新たな発見】、【満足感】、【思考の深化】に繋がったことも窺えた。

一方、アウトカム評価では、連携・協働意識尺度(下位尺度「子どもと保護者中心のケア」、「専門職との連携・協働」及び尺度全体)、日本語版 ATHCTS(下位尺度「ケアの質」、「子どもと保護者中心のケア」及び尺度全体)、日本語版 RIPLS(下位尺度「チームワークとコラボレーション」及び尺度全体)に有意な上昇が認められた。

これらの結果により本プログラムには、子ども・保護者の健康を扱う専門職の連携と協働に対する意識や、チームとしての協働意識、専門職連携について学ぶ準備性・志向性の向上に対し、一定の効果があったことが示唆された。一方、連携・協働意識尺度の「組織環境の整備」、日本語版 ATHCTS の「チームの有効性」、日本語版 RIPLS の「IP の機会」「専門性」には有意な上昇が認められず、質問票やプログラムの課題が示された。

## (2)「チームとしての学校」における協働に影響を与える要因の明確化

養護教諭へのインタビュー調査の結果に対してテキストマイニングを実施したところ、学校における連携・協働・コーディネートに影響を与える要因として、「人間関係の構築」「情報の共有・伝達」「校務分掌」等が得られた。さらに共起ネットワーク分析により、要因間の関係や要因と他概念の関係が明示化された。

で得られた要因と、新たに文献調査を行って得られた要因を併せて、シャインの組織文化論(【有形の人為的創造物】、【価値観】、【基本的仮定】の3層構造)に沿って分析した。その結果、【有形の人為的創造物】の下に「協働実践」や「協働しやすいレイアウト」等の要因が、【価値観】の下に「教諭と養護教諭の価値観の相違」等の要因が分類整理された。

また、インタビュー結果と先行研究を参考にしながら、協働概念を構成的に定義した(共有性、専門性、仲間性等)上で、これらの要因がどのように「協働」に影響を与えるか考察を加えた。そして「保健教育の実施、養護教諭と教諭の相互理解、管理職の適切な関与、適切な職場環境等が協働を促進する」という考えに基づく因果モデルを創出し、モデルに含まれる諸要因及び協働を問う質問票を作成した。

で作成した質問票を用いて、全国の養護教諭 3570 名を対象にアンケート調査を行い、971 名から回答を得た。回答を集計したところ、養護教諭の属性は、平均年齢が 38.9±12.5 歳、平均経験年数は 15.4±12.6 年、現勤務校における平均勤務年数は 2.7±2.3 年であった。一方、勤務校の属性は、校種が小学校 58.3%、中学校 30.6%、高等学校 11.1%、平均児童生徒数は 314.8±256.0 人、配属養護教諭数は 1 人 93.0%、平均教諭数は 25.0±13.8 人であった。

さらに回帰分析により、協働に影響を与える要因を調べたところ、「保健教育の実施」「養護教諭と教諭の相互理解」「管理職の適切な関与」が正の、「養護教諭・教諭の多忙」が負の影響を与えていた。さらに「保健教育の実施」は「養護教諭と教諭の相互理解」にも正の影響を与えていた。これらにより、卒前多職種連携教育プログラムには、保健教育への参画、他職種との相互理解、連携における管理職の関与の重要性や、多忙を軽減させるタイムマネジメントの説明を含めるべきという、重要な示唆が得られた。

### <引用文献>

- 文部科学省(2019): 文部科学省 中央教育審議会: チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申). Available at : [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afile/2016/02/05/1365657\\_00.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afile/2016/02/05/1365657_00.pdf) Accessed May 4, 2019
- 埼玉県立大学(2009): 第1章 IPW/IPE の理念とその姿 . pp.12-27、IPW を学ぶ 利用者中心の保健医療福祉連携、中央法規出版、2009
- Furr ら(2015): Furr S, Lane S, Serafica R et al. : Service-learning and interprofessional education in nursing: a critical Need. Journal of Christian Nursing 32 : 162-167, 2015
- 竹内ら(2017): 竹内佐智恵, 吉田和枝, 坂口美和ほか: 看護における多職種連携のための教育法: レビュー . 三重大学高等教育研究 23 : 99-106, 2017
- Cooper ら(2001): Cooper H, Carlisle C, Gibbs T et al. : Developing an evidence base for interdisciplinary learning: a systematic review. Journal of Advanced Nursing 35:228-237, 2001
- Barr H, Low H (2011): Barr H, Low H: CAIPE (2011) Principles of Interprofessional Education. Available at <https://www.caipe.org/resources/publications/barr-low-2011-principlesinterprofessional-education> Accessed May 4, 2019

- 山本（2017）：山本武志：医療プロフェッショナリズム概念の検討および評価尺度の開発とその教育実践への応用．北海道大学大学院教育学院博士論文，2017
- 山本ら（2012）：山本武志，酒井郁子，高橋平徳ほか：日本語版 Attitudes toward Health Care Teams Scale の信頼性・妥当性の検証．保健医療福祉連携 連携教育と連携実践 5：21-27，2012
- 田村ら（2012）：田村由美，ペイターボンジェ，多留ちえみほか：IPE 科目の効果：クラスルーム学習と合同初期体験実習が大学一年生の IPW 学習に及ぼす影響．保健医療福祉連携 連携教育と連携実践 4：84-95，2012
- エドガー・H. シャイン（2017）：エドガー・H. シャイン（著）、梅津祐良、横山哲夫（訳）：第1部 組織文化とリーダーシップを定義する．組織文化とリーダーシップ、pp.1-81、白桃書房、2017

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 齊藤理砂子, 朝倉隆司	4. 巻 62(5)
2. 論文標題 チームとしての学校づくりを目指した専門職連携教育プログラムの開発と評価の試み - 養護教諭課程と保健師課程に進級予定の大学生を対象に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 297-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小板橋恵美子, 小川純子, 佐佐木智絵, 藤野達也, 本多敏明, 坂下貴子, 雀部沙絵, 齊藤理砂子, 田中秀子, 岡澤順	4. 巻 12
2. 論文標題 千葉キャンパス三学部における多職種連携教育導入に向けた検討 - 卒業生を対象とした回顧的インタビュー調査より -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 淑徳大学看護栄養学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小板橋恵美子, 小川純子, 佐佐木智絵, 藤野達也, 本多敏明, 坂下貴子, 雀部沙絵, 齊藤理砂子, 田中秀子, 岡澤順	4. 巻 12
2. 論文標題 千葉キャンパス三学部における多職種連携教育導入に向けた検討 - 卒業生を対象とした回顧的インタビュー調査より -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 淑徳大学看護栄養学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 本多敏明, 坂下貴子, 佐佐木智絵, 小川純子, 小板橋恵美子, 雀部沙絵, 藤野達也, 齊藤理砂子, 田中秀子, 岡澤順	4. 巻 6
2. 論文標題 多職種連携教育に関する教員アンケート結果の報告 - 住民参加型専門職連携教育のプログラム構築に向けて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 淑徳大学高等教育研究開発センター年報2019年第6号	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川純子, 藤野達也, 雀部沙絵, 本多敏明, 坂下貴子, 佐佐木智絵, 小坂橋恵美子, 田中秀子, 齊藤理砂子, 岡澤順	4. 巻 6
2. 論文標題 地域住民参加型専門職連携教育試行プログラム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 淑徳大学高等教育研究開発センター年報2019年第6号	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小川純子, 本多敏明, 藤野達也, 雀部沙絵, 坂下貴子, 佐佐木智絵, 小坂橋恵美子, 齊藤理砂子, 岡澤順, 田中秀子
2. 発表標題 住民参加型専門職連携教育試行プログラム
3. 学会等名 第12回 日本保健医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小坂橋恵美子, 小川純子, 坂下貴子, 佐佐木智絵, 雀部沙絵, 本多敏明, 藤野達也, 齊藤理砂子, 田中秀子, 岡澤順
2. 発表標題 学部教育時における多職種連携能力育成に関する回顧的調査 多職種連携教育導入に向けたインタビュー調査より
3. 学会等名 第12回 日本保健医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齊藤理砂子
2. 発表標題 健康課題を持つ児童生徒の支援を目指した卒前多職種連携教育プログラムの開発とその評価
3. 学会等名 第15回日本健康相談活動学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 齊藤理砂子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 現代図書	5. 総ページ数 370
3. 書名 学校看護論 ～子どもの健康を守り育てる保健活動～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------